

第14話：皇帝の座

「皇帝の玉座は、煌びやかで、豪華絢爛。その座り心地は、身が沈むほどで、場合によっては、立ち上がれない。しかし、往々にして、引き摺り下ろす輩がいる。

(ムネモシュネ)」

インディオの少年、イシク・クルは、タロとディオの方に向き直って声を掛けました。

「僕、昔の仲間のことが心配なんだ。かつて、暮らしていた西、トテムの地に行ってくる。これから出発だ。」

「僕も連れて行ってよ！」「ぼくも！ ぼくも！」

タロ、ディオの二人も西に行くことになりました。白い野牛のパロも一緒です。今まで一緒だった海馬は野牛の群れに馴染み、ここで一旦、お別れです。頭上には雄鶏ピーターが大きな翼を拡げてついて行きます。

西への道に、初春の草花が小さな花をつけ始めています。三人は、春の小道のお散歩です。でも、出会う獣はなく、ましてや人影さえもないのです。

でも、暫く行くうちに、遠くに深い森が見えてきました。三人は深い森目指し進んで行きます。森に近づくとつれ、涼しい風が吹いてきます。静けさのなか、ホーホケキョの音が聞えます。でも、春まだ浅く、「ケキョ」の声には練習が必要です。梅の木もチラホラ蕾を付けています。森一帯は、聖域として囲われているようです。森の入口の柱の上に、なんと雄鶏ピーターが先回りしてとまっているではありませんか！でも、三人が近づいても、微動だにしません。それどころか、三人の頭上の遙か後から雄鶏ピーターが嫌々ついてくるのが見えました。

「じゃ、あれはなんだろう？」

森の入口に立っていたのは、二本のトーテムポールです。森全体が、トテムの祖先の霊を守る聖域で、トーテムはその番人なのです。森に入り、先に進むと、まんさくが黄色い花をつけています。花言葉は「呪文：魔力：靈感」で、出来る実は、魔女のハシバミ、ヘーゼルナッツです。

森のなかほどには、七本のトーテムポールがあります。ポールには、上から下まで、トテム族が祖先と敬う動物たちが彫られています。

この七つの柱に囲まれ、磨き上げられた平らな台があり、その台の上に、寝台になりそうな大きな椅子があります。少年は声を上げました。

「これが話に聞いていた『皇帝の座』なんだ！」

タロは尋ねました。「『皇帝の座』って何さ？」

「『皇帝の座』っていうのは、トテムの大酋長が、部族一統を集めて開く集会の際に座る椅子さ。」

タロの傍にいて手を繋いでいたディオは、手を振り払い、突然駆け出し、石の台によじ登ろうとしましたが、まだ背が低く、台に手が届きません。二人の方を振り返って肩車をしてほしい様子です。二人は台の方へ近づきます。少年は、台の高さを目測し、その場を離れ、腰に差したなたで、近くにあるまんさくの木を切り落とします。木の枝から黄色い花の花びらがチラチラ散っていきます。少年は、木の枝から一本の長い棹を作りました。その棹を握りしめ、台に向かって走り始めました。台の直前で持っている棹の先端を地面に差すと、少年の体は宙返りし、台の上に登ることができました。

タロとディオとはその早業にただびっくりするばかり。

少年は両手を叩き、その手をズボンにこすりつけて、埃を落とした後で、台の上の椅子に登る挑戦をします。

もう棹はなく、自力でよじ登るしかありません。まず椅子の端に両手を掛け、両手で全身を引き上げます。暫く時間が経って、少年の顔が真っ赤になりました。少年は、片方の足を椅子の端に絡ませることができました。両手、片足に力を込めて、遂に、体全体を椅子の上に乗せることに成功したのです。

少年は、『皇帝の座』をものにすることができたのです。

タロ、ディオの眼にも、少年が偉くなった気がしました。

少年が椅子に座るや否や、今まで静かだった森の境内に、激しい風が吹き荒れ始めました。あまりにも激風のため、タロとディオは眼も開けていられないほどでした。

『皇帝の座』には、大きな背板と側板とがあって、ビクともしません。幸いにも、風は一方向から吹いています。タロとディオは、風下の台の影に身を潜めて、風を避け、暫く眠りに落ちました。森を目指した長らく歩きましたので、つい疲れが出たんでしょう。タロは夢を見ました。

タロは、どうやら箱のなかに入っているようです。そう言えば、家に送られてくる荷物が入っていた段ボールに覗き穴をいくつか作り、そのなかで隠れて遊んだことがあります。タロは、覗き穴から外を覗いています。箱は、高い木の枝の上にあるようです。激しい羽ばたきの音が聞えます。一番下の覗き穴から覗くと、白い毛足が見えます。暫くすると、箱が揺れるほど大きな風が吹き、羽ばたく音が遠くになりました。暫くすると、激しい羽ばたきの音が聞えます。真ん中の覗き穴から覗いて見ると、後ろ姿でしょうか、白い尾羽が見えますが、やはり暫くすると、箱が揺れるほど大きな風が吹き、羽ばたく音が遠く去って行きました。また暫くすると、激しい羽ばたきの音が聞えます。一番上の覗き穴から覗くと白い頭が見えます。鋭い眼がタロを睨みつけています。三羽とも大きな鳥、どうやら鷺のようです。白い毛足の大鷺、尾が白い尾白鷺、頭が白い白頭鷺の三羽が変わるがわるやって来たようです。突然、ピカッ、と稲光がしたかと思うと、けたたましい雷鳴が響きわたりました。タロが隠れていた箱は、激しい風で吹き飛ばされました。

風がタロの顔を叩きました。やっと目を開けると、西の空の遙か向こうに、真っ黒な渦巻きの柱が天地を結んでいるのが見えます。そう、竜巻です。龍が天上界と下界とを結び、上下を行き来する道です。竜巻は、ゆっくりとタロの方に近づいてきます。タロは、頭を手で抱えて、地面に寝転びました、その上を、竜巻が通って行きます。あまりの烈風の激しさに、タロは固まりました。

暫く待つと、いつしか風も収まり静けさが戻りました。ディオは風のなか飛び跳ねています。

タロは、台の影から身を起こすと、『皇帝の座』の椅子に座っているはずの少年を見上げました。でも、なんといいことでしょうか？いるはずの少年の姿は、影も形もなく、消え失せているではありませんか！少年の代わりに『皇帝の座』にとまっているのは、夢のなかで、タロを睨みつけていた頭の白い鷲、そう白頭鷲です。白頭鷲は、緊張のあまり気を失いそうな雄鶏ピーターに、威嚇するような一瞥を向けたかと思うと、大きく羽ばたいて、太陽の沈む方角へと飛び去りました。

この『皇帝の座』の夜空の所在地は、祭壇座です。

その脇を、時折、彗星が滑り抜けていきます。

タロは気になって、ズボンのポケットの小さなノートを開くと、十二頁目に文字が書いてあります。

「易経：上卦＝風：下卦＝山：風山漸」

「次第に伸びゆく木：千里も一歩ずつ：着実な成長」

枯れゆく樹あり、でも若い芽も育つ。

「鶯が山里で鳴き始める」そんな季節です。

それからどうなったでしょう？お話し、続きはまた明日！